

館山支部だより Vol.117



<西洋朝顔の一種>
種なし宿根草で繁殖力は極めて旺盛(拙宅の庭先にて)

前例を見ない「諸物価の値上げ」という「思わぬ副産物」が残りましたが、3年余に及んだコロナ禍も第5類への移行とともに 社会生活も本来の姿を取り戻しつつあることは誠に喜ばしいことです。原状への復帰、失われたものを取り戻すことは至難ですが、隊友会支部活動の目的・本来の姿を求め、余す今年度を(場合によっては多少の背伸びも厭わず)少しでも回復に努める所存です。 <支部長>

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230

支部の活動概要

《6・7月の活動実績》

- 6 4(日) 館砲校出身戦没者慰霊祭(館砲祈念塔)
- 7 1(土) 県隊友会前期支部長会議(千葉市民会館)
- 7 29(土) 7月支部役員会(コミセン)

《8・9月の活動予定》

- 9.30(土) 9月支部役員会(コミセン)
- <備考> 今年度の館山航空基地の開隊記念諸行事について
まだ案内状が出されておきませんが、10月中旬実施の方向で検討中、との情報(非公式)もあります。

災害時の防災備蓄品の払出作業等協力について

県隊友会が平成29(2017)年度に千葉県との間で取り交わした「防災協定(自然災害等緊急時における協力)」に基づく作業の一環として、防災備蓄倉庫備蓄品の管理・払出作業等の協力が挙げられます。県内の10カ所の防災備蓄倉庫については、それぞれ指定された近隣支部が協力するようになっておりますが、安房地区の防災備蓄倉庫(館山市内亀ヶ原)については、安房支部が主務、館山支部は補助的な役割に任ずることによって現在に至っております。

一部の備蓄倉庫については備蓄品の払出訓練の実績はありますが、全般的にまだ「実動(実際の作業)」が無いというのが実状のようです。緊急時に即応を欠いたり齟齬をきたしたのでは足手まといになりかねません。

備蓄倉庫を管理する立場の地域振興事務所担当者等の業務に対する認識の薄さとともに、館山支部の協力態勢等について日向支部顧問からご指摘をいただきましたので、支部役員会での検討を経て、早い時期に支部としての善後策を講ずる所存ですので、会員の皆さんの積極的なご理解・ご協力をお願いするものです。 <支部長>

落下傘部隊戦没者慰霊祭(安房神社)「空挺同志会」会員が参列

5月27日(土)に安房神社で行われた恒例の標記の慰霊行事に、全日本空挺同志会千葉県支部の会員十数名が参列しました。2018年と2019年にそれぞれ20名近い同志会会員が慰霊祭に参加した経緯がありますが、コロナ禍で途絶え今回4年ぶりの参加となったものです。

この慰霊行事は、平成5年、旧海軍落下傘会の解散とともに慰霊祭の催行が安房神社に委嘱され、以降、ごく少数の近親者、関係者等が参加して厳かに永々と続けられてきたものです。

今回の慰霊祭に空挺同志会有志の方々(有志)が遠路を厭わず来館され、日米開戦劈頭に陸海軍が敢行した空前絶後の空挺降下作戦の戦死者の霊に対して、陸海の別を越えて哀悼の意を捧げられたことに 深甚なる敬意と謝意を表す次第です。散華されこの地に眠られる英霊もさぞ安堵されたことでしょう。地元自衛隊OB団体の館山支部として3名の会員が慰霊祭に加わりました。なお本田雅晴会員が自宅近くで早朝に収穫した旬の「真竹(筍)」をお土産にそれぞれ参加者に配り、大変喜ばれました。 <支部長>

<備考> 「全日本空挺同志会」とは、陸自の空挺関係者で構成される全国的な規模の団体で、「挺身赴難・精鋭無比」の伝統精神を継承し、会員相互の連繋感の醸成、空挺部隊等の充実発展を祈念し、毎年、高野山に多くの会員が集い、「空挺落下傘部隊将兵之墓」前にて同会主催で盛大な慰霊祭を行っております。

「隊友紙 WEB化」の試行について

前年度の隊友会定時総会で発議された「隊友紙のWEB化」について、一部の県での試行を経て今年度以降全国的な試行が行われますが、目的は隊友紙のペーパーレス化ではなく、PDF(電子版)による情報開示という時代のニーズに応える意図のようです。

手順は「https://www.taiyukai.or.jp/」にアクセスし、閲覧にはパスワードが必要になりますが、ID/パスワードは別途本部から各支部に伝達されます。 <支部事務局>



<香(こうやつ)砲台跡(壕内)>
市内8カ所の砲台のうち、香・浜田砲台は州ノ空が受持っていた。
写真のトンネル壕は8cm高角砲をレールを敷いて搬出・搬入できるように工夫を凝らしたものと史料される。(筆者注)

雑感 「驚くべきAI(人工知能)の進化・交錯する期待と不安」

このところ「生成AI」に関する報道や議論が紙面を賑わしております。教育現場では児童・生徒の思考力や判断力の向上のため、生成AIの手法が積極的に取り入れられておりますが、最近、児童・生徒の作文コンクールや夏休みの宿題に生成AIの使用が禁止されたり、文化省から各大学に対してAIの利用に関する指針をまとめるよう通達が出されております。全国の自治体の中でも試行を含めて生成AI技術を行政に取りこんでいるところもあるようです。

生成AIの新技術と言われる対話型アプリ「チャットGPT」が、昨年11月の公開以来、わずか2ヶ月で世界中のユーザーが1億人を超えるという史上最速の普及率は、進化のテンポとともに驚異的と言っても良いでしょう。生成AIが、ここまで社会生活の中に入り込み社会問題として取り上げられていることは、それがきわめて急テンポだけに戸惑いすら感じますが、これは今後とも日進月歩のペースで変わっていくことでしょう。鷹揚に構えていたのでは社会から取り残されてしまいそうな不安に駆られ、老骨に鞭打って生成AIのカラクリを探ってみようという野心にかられました。

生成AIはどこまで進化するのだろうか、人間の判断・役割は?

AIはデータの記憶容量の面で、自然・社会・人文科学等あらゆる専門分野の知識を網羅している点で、人間の頭脳とは比較にならないほど膨大な知識を蓄えているのです。しかも人間のように忘れるとか勘違い等々の問題は皆無、正確無比なのです。しかもこれを学習させることによってその能力を飛躍的に増大させることのできる無限の可能性秘めていると言われております。その筋の専門家の言によれば、人間の頭脳のように「ものを考え、判断する」能力は備えていないと言われておりますが、このへんに生成AIには人間の頭脳を超える可能性が秘められているのではないのでしょうか。これ以上深入りすると支離滅裂になると困るのでこのへんに止めておきますが、よく対話型のチャットGPTを使うと作文や膨大な論文もいともたやすく作ることができると言われておりますが、AIに有用な答えを出させるためには、利用者の「質問力」が決め手になると言われております。「生成AIに使われる」のではなく、「生成AIを使いこなす」ところに人間の能力を超えた成果を期待することができるのではないのでしょうか。

生成AIの功罪、「悪用」に対する懸念

史上最年少で数々のタイトルを獲得してきた藤井聡太名人は、プロ入り前から将棋AIソフトを愛用してきたと言われ、つい最近の叡王戦のあとの記念イベントで、「形勢を読む力が付いてきた」と述べているように、藤井名人にとって「ソフトを愛用する」と言うことは「ソフトを使いこなす、これを超える」ということのように思われます。叡王戦でAIが出せなかった答えを、藤井名人は対局中に頭の中で考え出し、観戦中の名人連を唖然させたと言われます。片やこの6月の全国学生将棋連盟主催の名人戦の優勝者が、対局中に頻りに席を外したことに不審を抱いた審判員が調べたところ、対局中に(別の場所で)将棋AIアプリを利用した疑いで優勝を取り消された事例がありました。ソフトを使いこなすか、ソフトに使われるかというところに両者の大きな相違があるのではないかと思います。

後を絶たない特殊電話詐欺やフィッシング詐欺等々、後から後から今までにない手段・方法を編み出し、いずれ生成AIの技法を悪用する者が出てきそうな気がします。このように生成AIは「善・悪両面で極めて大きな力」を持っていると言われております。

AIのリスクに危機感を抱く米国の、チャットGPTへの対抗策とともに大統領令によるAI規制に乗り出し、国連も生成AIの「ルールづくり」に着手しております。令和の浦島太郎にならないためにも少し身を入れて?勉強することにしました。

<匿名希望会員、海>

館山航空基地を舞台に繰り広げられた対空戦闘

日米開戦までは南房総地域の対空砲台は、横須賀海軍警備隊指揮下の城山砲台だけだった。8センチ単装高角砲(海軍は「高射砲」とは呼ばなかった)4門と対空機銃を備え、100名近くの砲台要員が常駐していた。日米開戦直前のS16. 6、陸戦・対空砲台要員の養成のため横須賀砲術学校から分離して館山砲術学校が開校され、東・西各砲台が建設されたが訓練用砲弾しか備えていなかった。

開戦翌年の春、突如、空母を発艦した米空軍のB-24爆撃機編隊が関東から東海、九州方面を急襲するという予想だにできなかった出来事が起こった(いわゆる「ドーリットル爆撃隊」)。防空体制の脆弱性を露呈する結果になったが、即防空体制の強化には結び付かなかった。

館山地区の防空体制強化

S19. 7のサイパン島の陥落に続くグアム、テニアン等マリアナ群島の失陥は、わが国の「絶対国防圏」の消滅であり、マリアナ基地を本拠とする本土に対する航空攻撃の脅威が現実のものとなった。これによって陸海軍は国防思想の大転換を余儀なくされ、S19年秋には館山地区に第170防空隊が編成され、城山を含め安布里、船形、浜田ほか市内8カ所に防空砲台のほか各所に対空機銃陣地が建設された。

本来、砲台要員には砲術学校出身者が配員されるのが常であるが、南方戦線での多くの人的消耗に加えて硫黄島、沖縄、八丈島等の島嶼警備が最重要視され、本土の防空隊は横須賀警備隊司令部の砲隊指揮を受ける建前であったが、新編された170防空隊には館山基地(一部は洲ノ埼航空隊)の隊員が充当された。これが現実の姿であった。

基地を舞台に繰り広げられた対空・防空戦闘

終戦の年の2月16・17日の2日間にわたって館山基地は米機動部隊の艦載機編隊の空襲に見舞われた。硫黄島上陸(19日)の前哨戦として行われた艦載機による関東一円の陸海飛行場に対する攻撃の一環であった。折しも館山基地は、房総沖に出没した米潜掃討作戦のため、司令部を館山に置く対潜航空部隊903空隷下の横須賀空、霞ヶ浦空等30数機の航空機が集結し、掃討作戦に従事する中に出発した。

2日間にわたり頻りに来襲した艦載機編隊、これを迎え撃つ基地隊員が配備について対空砲台、そして空襲の合間をぬって出撃する対潜掃討部隊(哨戒機等)、さらに基地の防空を担っていた252空戦闘飛行隊館山派遣隊(零戦)による迎撃戦闘等々、平常はのどかな館山基地もさぞ凄惨な修羅場と化したであろうことは想像に難くない。このときの状況は903空司令部の戦闘詳報に生々しく記されている。

これは館山基地隊員に限らず館山市民が初めて目にしたであろう米機動部隊艦載機編隊の空襲でもあった。当時の安房中(現在の安房校)の教務日誌には、「敵小型機十数機、館山基地を急降下爆撃」と記述されている。

<自称地域史探索マニア その40>